

## 聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

### 第9章 エルサレム教会における祈り③



#### 祈りの優先順位

#### 死を目前にしての祈り



#### 祈りの優先順位

信仰のリーダーとして牧会の働きに召された人々は、十分に注意をしていなければ、ほどなく、次のような問題にがんじがらめになっている自分に気づくものです。すなわち、人々は、祈りをもって主を待ち望んでいる中でも、物乞いに陥ってしまいがちだという問題です。同じ問題は、まだ生まれたばかりの教会の前にも立ちはだかっていました。教会が急激に成長しているという興奮のただ中で、一つの問題が浮かび上がります。新しく改宗した人々のグループの一つが、リーダーたちに対して、自分たちのうちの未亡人たちが配給の中で見過ごしにされていると不満を訴えたのです。比類なき一致の中で始まった聖霊の動きが、突如として深刻な不和に直面したのです。

使徒たちは、貧しい未亡人たちに必要なものを配給することを重要視していました。しかし彼らには、より高い使命がありました。なおざりにできない使命です。彼らは、信仰のリーダーたちが誰しも直面する問いに取り組んでいたのです。日常の必要のための働きが、霊的な必要のための働きに優先されていくのを放置していいのか、という問いです。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓 [著者注準お金] のことに仕えるのはよくありません」(使徒 6:2) という彼らの決断は、当時はもちろん、今日にとっても良いものです。この結論は、

教会が自らのケアをする必要がないことを示唆するものでは決してなく、教会の慈善の働きは、みことばの奉仕に携わる人々とは別の人々が当たらなければならないことを教えているのです(3節)。そうでないと、永遠の事柄を扱うという最も大切な働きが、そこまでは重要でない日常の関心に置き換わってしまうのです。

使徒たちからの依頼の細部についてはわかりませんが、「祈り」と「説教」との間にバランスがあったのは明らかです。「**私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします**」(6:4)。これは、それぞれが互いを補完し合うものでした。祈りがなくては、みことばの奉仕は不毛なものとなりますし、みことばの奉仕がなくては、祈りは、とりわけ教職者の歩みにあっては、それが成就する主要な機会を奪われてしまいます。

説教者に祈り方を教える学校があるならば、神が祈りを重要なものと見ておられる通り、神学を教えるあらゆる学校に優って真の敬虔、真の礼拝、真の説教に益することであろう。……優れた考えの持ち主、優れた学び手である説教者であれば、祈り手としても最も優れた者でなければならない。さもなくば彼らは、信仰から迷い出る者、冷たいプロフェッショナル、合理主義者の中で最も酷い者となるのであり、神の評価において、説教者の中の最も小さい者よりもさらに劣る者となるのである。

説教者は、あらゆる形式の祈りに精通していなければなりません。そして、人々の前に立って訴える前に、神に訴えることを学ばなければなりません。また、神の栄光と福音を伝えたいと願う以前に、神との交わりを深く楽しむ者でなければなりません。さらに、「来て、救い主を信じるように」と人々を招く以前に、熱心なとりなしと願いを捧げることを学ばなければなりません。デイビッド・ブレイナードの祈りについて、ジョナサン・エドワーズが次のように観察しています。

彼の[著者注:生涯の]歴史を見ると、牧会の働きにおける成功への正しい道がわかる。……キリストと人々の魂への愛に励まされ、彼はまさしく「常に熱心に務めていた」。ことばと教理のみならず、公共の場と私的な場のみならず、昼夜を問わず祈りにおいてもそうであった。隠れたところで「神と格闘し」、「産みの苦しみを味わい」、ことばにならないうめきと痛みをもって、自分が遣わされている人々の心の中に「キリストがかたち造られるまで」祈っていたのである。……あたかもヤコブの真の息子として、彼は夜の深い暗闇を抜け、朝が明けるまで闘いの中を耐えたのである。」

今日の教会においては、物質的な必要を満たすために払う労力と、失われた魂に向けて福音を語るために払う労力をめぐり、絶えず衝突が続いています。これはどのように解決すればいいのでしょうか。みことばの奉仕に携わる人々は、神から与えられた働きよりも物質的な必要を満たす奉仕を優先することで本来の働きを疎かにしてはいけません。福音宣教に召された人の最優先事項は、祈りとみことばの奉仕であり続けるべきなのです。

## 死を目前にしての祈り

ステパノはその直前まで、キリストを拒む同胞のユダヤ人たちに向かって、心を探る、熱いメッセージを語っていました(使徒7:2-53)。彼は次のように宣言し、彼らを大胆に非難しました。「**かたくなで、心と耳とに割礼**

を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです」(使徒 7:51)。ユダヤ人たちはこれに応答しました。「人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりした。……人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。……こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた」(使徒 7:54,57-60)。

迫害や虐待に対して私たちはどのように応答すべきでしょうか。

反対者に対しては、呪いの言葉を吐き、彼らの上に天の怒りを呼び落とすべきでしょうか。ステパノほどの人物でなければそのような形で応答したかもしれませんが、聖霊に満たされたこの信徒伝道者は違いました。彼はどこにでもいるような俗物ではありませんでした。というのも、彼の内に宿っていたのは「この世の」ではなく「**神の御霊**」(1 コリント 2:12)であったからです。恐ろしい暴力の犠牲となりながらも、彼はそれに謙遜に応答し、「その贖われた魂には復讐心のかけらも見出せませんでした。そこにあったのはただ、次の瞬間には自分の命を奪おうとする人々に対する憐れみと柔和な気遣いだったのです。

ステパノの祈りには、二つの関心が表されています。すなわち、①自らの霊の行き先と ②敵の幸せです。彼ほど主の模範に従うことのできた人はありませんでした。数か月前には、悪しき者たちの手にあって死を迎えられる中で、十字架の上にイエスの言葉が響きます。「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(ルカ 23:46)。今度はステパノが叫びます。「主イエスよ・私の霊をお受けください」。彼はすでに彼方の世界をかいま見ており(使徒 7:55-56 参照)、その栄光によって、感じていた痛みも和らいでいたようにも思われます。彼はまた、「肉体を離れ」ることは「主のみもとにいる」こと(2 コリント 5:8)だと知っていたのです。

ステパノが体の救出、すなわちそこから解放されるという奇跡を願ってはいないことは注目に値します。

イエスが神のみこころにより、悪しき者たちの手によって死なれたように、そのしもべたちにも同様のことがあるかもしれません。神のみこころは、生きることと同じくらい、死ぬことによって全うされるかもしれないのです。キリストのしもべである私たちも、結果がどうあれ、ステパノと同様に、神のみこころに完全に従順でなければなりません。ステパノは言葉にはしてはいませんが、『みこころがなりますように』と祈っていたのは確かです。

自らの霊を主に委ねたステパノは、次に、断固として罪を行おうとする同胞たちに対して真摯な気遣いを向けます。彼はひざまずき、その顔は真っ直ぐに天に向けられ、天の神への素晴らしい謙遜と祈りに満ちてみもとに近づく姿を表しています。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください」というステパノの祈りは、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)という十字架上の主の祈りになります。これは、見ている人々の心を貫き通す、きわめて鋭い剣となったに違いありません。彼らはステパノを殺そうとしていましたが、彼は、そんな彼らのために切に祈っていたのです。信じられません。考えられません。しかし、それは大声で、はっきりと語られたものでした。彼はまさに、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです」(マタイ 5:44-45)という主のご命令を全うしていたのです。

この尋常ではない祈りと模範的な死に方から生み出されたものは何でしょうか。

その悪質で血に飢えた群衆の中には少なくとも一人、その全存在を賭けて、恐れを知らぬステパノを殺すだけでなく、教会全体を破壊することに夢中になっている人物がいました。タルソ出身、冷酷なサウロです（使徒 7:58 参照）。ステパノが、あの私心のない祈りを捧げていなければ、イエス・キリストの教会は、その英雄のリストの中に一人の使徒、異邦人のための使徒を加えることはなかったかもしれません。ステパノは、地に落ちて死んだ。粒の麦でした。そこから「豊かな実」（ヨハネ 12:24 参照）が実ったのです。殉教したこの種からは、まさに豊かな実が実りました。使徒の働きに繰り返し言及されているように、まずはパウロが、そしてユダヤ人と異邦人の双方から、パウロ自身の働きを通してキリストを信じた無数の人々が生まれたのです。

---

### 《学びのための問い》

1. 今の時代、聖霊のバプテスマを受けるまで、時間を決めずに祈る必要はあるでしょうか。二十世紀の前半に一般的であった「待望会」を開くことの価値は、どこにあったのでしょうか。
2. 「嘆きの壁」（すなわち、エルサレムの神殿の園庭の西側の壁）で祈るユダヤ人には、祈る区域が男性と女性とで分かれています。ペンテコステの日に先立つ階上の間は、性別による分離をどう変えたのでしょうか。それは、なぜだったのでしょうか。
3. 定期的に祈ることの価値としては、例えばどんなものがあるのでしょうか。
4. 使徒の働き 4章 24-31 節で、その場所を揺り動かしたのはどんな種類の祈りだったのでしょうか。このことは、迫害の時代における祈りについて何を教えてくれているのでしょうか。
5. 牧師たちが祈りとみことばの奉仕を最優先にするために、私たちはどのように助けていけばよいのでしょうか。